

博士論文要旨

氏名	足立 邦子
学位の種類	博士（人間科学）
学位記番号	甲第13号
学位授与年月日	平成24年3月16日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第5条1項の規程による
学位論文題目	A Cross – Cultural Study of Ambiguity Aversion and Choice in Probability Judgments.

論文の要旨

近年、確率判断の認知プロセスは文化普遍的ではなく、Nisbettらによって文化依存的であることが明らかにされている。彼らの理論によると、西洋人は分析的認知をもち、東洋人は全体的認知をもつとされ、それは確率判断や意思決定にも影響を与えるとされる。しかしながら、確率判断の研究における曖昧性忌避（ambiguity aversion）と呼ばれる現象について比較文化研究は行われていない。曖昧性忌避とは、のエルスバーグの2色問題（Ellsberg's two-color problem）において、当たりの出る確率が明確なリスク性の条件のくじ箱と、当たりの出る確率が不明確な曖昧性の条件のくじ箱を対にして提示すれば、どちらの条件も当たりの出る確率は1/2であるにも関わらず、リスク性の方が曖昧性よりも当たりの出る確率が高いと判断される現象を指す。しかし、それぞれの条件を独立に提示した場合、両者の間における確率判断には差がなくなることがわかったが、これを比較無知仮説（comparative ignorance hypothesis）と呼ぶ。本研究では、曖昧性忌避に関わる比較無知仮説が文化普遍的に適用可能か、それとも文化依存的であるかどうか検討した。本研究における第2の目的として、比較文化心理学で扱われる個人の選択（personal choice）と他者の選択（other choice）の効果について検討した。個人の選択とは、たとえばくじ引きをする際、自分でくじを引くことを指す。他者の選択とは、相手がくじを引き、他者によって自分の勝敗が決められることを指す。選択の好みは、文化心理学の研究において理論化された自己観と関わりがある。この理論によれば、西洋人は相互独立的自己観をもち、一方東洋人は相互協調的自己観をもつとされ、前者では個人の選択は好まれ、後者では必ずしも好まれない。本研究では比較無知仮説と選択の効果を検討するため、エルスバーグの2色問題を用い、西洋人としてフランス人実験参加者を、東洋人として日本人実験参加者を対象に2つの実験を行った。

実験1では、フランス人実験参加者120名（個人の選択条件61名、他者の選択条件59名）と日本人実験参加者114名（個人の選択条件57名、他者の選択条件57名）を対象に、エルスバーグの2色問題のリスク性の条件のくじ箱と曖昧性の条件のくじ箱を対にして提示し、それら2つの箱を直接比較できる状況を設定した。実験参加者は、それぞれの箱に対しゲームをするならば最大

いくら賭けられるか、フランス人には€0～€100、日本人には¥0～¥10000で答えてもらった。実験2では実験1とは別のフランス人実験参加者174名（個人の選択・リスク性の箱条件42名、個人の選択・曖昧性の箱条件44名、他者の選択・リスク性の箱条件44名、他者の選択・曖昧性の箱条件44名）と日本人実験参加者168名（個人の選択・リスク性の箱条件、個人の選択・曖昧性の箱条件、他者の選択・リスク性の箱条件、他者の選択・曖昧性の箱条件すべて42名ずつ）を対象に、リスク性の条件のくじ箱と曖昧性の条件のくじ箱を別々に提示し、2つの箱を直接比較できない状況を設定した。回答の仕方は実験1と同様であった。

2つの実験の結果、実験1、実験2ともに曖昧性忌避が生じ、比較無知仮説は支持されなかった。しかしながら、分散分析による不確実性の程度の主効果の効果量は、実験1では $\eta^2=.06$ であり、実験2では $\eta^2=.04$ であった。これは実験1よりも実験2は効果量が減少しており、曖昧性忌避の効果が弱まったことを示唆する。つまり、比較無知仮説が完全に棄却されることにはならず、弱い比較無知仮説（a weak version of comparative ignorance hypothesis）が支持されたといえる。実験2で比較の効果が十分に減少しなかったのは、日本人実験参加者において、曖昧性の箱のみを提示されているにも関わらず、全体的認知の影響によって自然に心の中で2つの箱を比較していたことに起因するのかもしれない。この点を明らかにすることは今後の課題である。

個人の選択の効果は、フランス人の方が日本人よりも高くなり、個人の選択はフランス人の方が日本人よりも好まれることが示された。それは比較文化心理学における知見と一致することがわかった。この結果は、相互独立的自己観をもつ西洋人にとって自分で選択をする機会が好まれ、一方、相互協調的自己観をもつ東洋人にとってはそうではないという知見と一致するものである。しかしながら、フランス人、日本人実験参加者ともに、予測に反して文化内における選択の効果は得られず、比較文化研究の知見と一致するものではなかった。これは、同一文化圏内においても異なる思考スタイルが存在することを示唆する。ただし本研究ではその点は十分に検討できていない。今後のさらなる研究が必要である。